



金光図書館通信

ミニ

特集
初代館長 金光鑑太郎師



わが町に生れし金光図書館に
奉仕わがせし遠き若き日 碧水

展示室リニューアルのお知らせ
2021年4月3日～
教庁1階 展示室の内容が一新しました。

第1展示室
—金光大神のご信心を求める
「お広前相勤め」の日々をたずねて—

第2展示室
清水比庵
—碧水との心の交流—

第1展示室では、教祖様が使われていた日用品や、家具、着物などを展示させて頂いています。
当時の暮らしや御事蹟にも触れながら、教祖様をより身近に感じていただける内容になっております。
また、どなたにもわかりやすいように、いたずら好きなネコのシロと、働きものの牛が会話をする形でガイドをしています。
※ちなみにネコと牛は、教祖様がお宅で飼われていた動物なのだそうです。



教祖様のことなら
にゃんでも聞いてニャ!



まってるモー。

また第2展示室では、郷土出身の芸術家、清水比庵と四代金光様（金光碧水）の心の交流をテーマに、書や歌などの作品のほか、交わされた絵手紙等も展示しています。

※図書館開館中に閉まっている場合は、お手数ですが
カウンターまでお知らせください。

スタンプカードはお持ちですか？



スタンプカードに、スタンプが12個たまると、心ばかりのプレゼントをさし上げます。(期限はありません)
・本を借りると、1日1個押せます。
・県外の方は、1日2個押せます。
ご希望の方は、カウンターまでお気軽にお声かけください。

四代金光様を偲ぶ
とりかかれば簡単にすむひとつこと
暇をつくりてなし終へにけり 碧水
何かひとつ事を済ますには、どうしても取りかからなくてはならない。取りかかればどうでもないこともあり、取りかかっても思うように進まない場合もある。思うように進まないとき腹が立ったり、思いの丈をぶちまけたくなるようなこともある。そのようなときこそ、神様に心を向けなければと、われに立ち返り神様に縋る日々を送っている。
金光四神様が桂ミツ師に「神に縋って辛抱せよ」とみ教えくださっているが、神にお縋りしてご用にあたらなければと自分に言い聞かせている。
そういえば四代金光様も「辛抱せにゃあなあ」とよく教えてくださったことを思い出しながら。
(図書館次長 金光研治)



お探しの本、調べたいことなど
なんでもご相談ください。

金光図書館は、あなたの本棚です。

※「金光図書館通信ミニ」は、点字版・音声版もごございます。
ご希望の方は、電話・FAX等でご連絡ください。

KONKO LIBRARY

〒719-0111 岡山県浅口市金光町大谷320

☎ (0865) 42-2054 ☎ (0865) 42-3134

✉ konko-library@konkokyo.or.jp

🏠 <http://www.konkokyo.or.jp/konko-library>



本年は、金光図書館初代館長 金光鑑太郎師が御帰幽になられてから、30年のお年柄にあたります。そこで、今回は書籍を通して在りし日のお姿を偲ばせていただきたいと思います。

金光図書館初代館長としてのお姿

昨日見し書のあれよと交換本を持ちて
わが乗る朝の列車に（金光図書館報『土』第1号より）



私がよく図書館に通うので、当時、館長であられた鑑太郎先生がじきに顔を覚えて下さり、図書館の廊下などで先生にお会いすると「やあー」「お早う」「今日は早くから来ているね」などと、にこにこしながら時々声をかけて下さいました。 坂本忠次／著 『いのちの今』より

ご自分の自転車で玉島の本屋に買いに行っておられました。寒い時は、進駐軍が着ていた柿色の暖いオーバーを着られ、自転車の後ろに本を山積にされ、自転車が潰れはしないかと思う程でした。（中略）そのオーバーのポケットには、何時もチョコレートなどをいれておられ、子供達を喜ばせておられました。（中略）又、レコードコンサート、各種の展覧会など総て、ポスターは自分で作られました。

古川嘉智子／著 『いのちの今』より



当時レコードコンサートは
毎月1回行われていました。

初代館長直筆看板

生きる力の贈りもの

私も、図書館長時代にレコードコンサートを始めた時、そうじゃった。一人でもと思ってやっていた。わざわざ聞きに来てくださった人を相手に、本気でとりくんだ。来てくださる人があるからとお礼を申しておった。 『生きる力の贈りもの』より

教庁職員としてのお姿

人ぞ知る二十数貫の巨軀、円やかな童顔、澄んだ大きい瞳が時々タイズラっぽく輝やくと見るや、「ウーワッハッハッ…」と地から湧く如き爆笑を起し給う。（中略）教庁に勤務せられ、金光様のご長男とて教団に奉仕されることに一般教師と変わらないことを身をもって示される。さりとして特別扱いかというに左にあらず。封筒書きでも書類の整理でも、どんどん部下に率先して自ら陣頭に立たれる。師の部下課員を愛せられることは定評がある。「血が通う仲」と言うがまさにそれで、見る眼にも美しい。

『人物点描 一先師たちの横顔一』より



書家・歌人としてのお姿（雅号 碧水）

碧水先生は書をかかれることが心からお好きではなかったか、そう思うのです。（中略）ある日のこと「いつも、ええですなアーとほめてくれるが、浅野君の、ええですなアーは、その云い方でチャンとできぐあいが、わかるんだよ」と、お話になられたことがありました。（中略）それにしても、碧水先生は書を書くことがお好きでした。

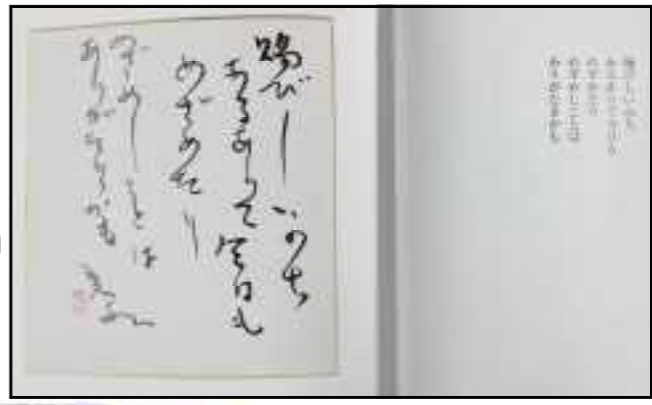
浅野五牛／著 『いのちの今』より



ある日、歌の一ヶ所がどうしても納得いかない。そこで先生を訪ね「先生こここのところは図書館にあるほどの辞書類を調べても、そういう云い方はないんです」と申しあげた。先生は「そうか」と、しばらくその歌をみておられたが、「然し、こういわんと私の気持ちがすまんのじゃ、笑われてもかまいません」といいきられた。このひと言で目からうろこが落ちた気がして、「あんたも歌をつくるようになったんじゃけえー」とたのまれた真意が納得できたのである。

秋田征矢雄／著 『いのちの今』より

『道 金光碧水作品集』より



父にすぎり師にすぎりつつわがいのち
うたのかたちにとどめのこしゆく
もつ筆が今朝書きくれしなかの一字
父に似た字と見つつほほえむ

『金光碧水歌集 土』より

『歌集土』
全19集

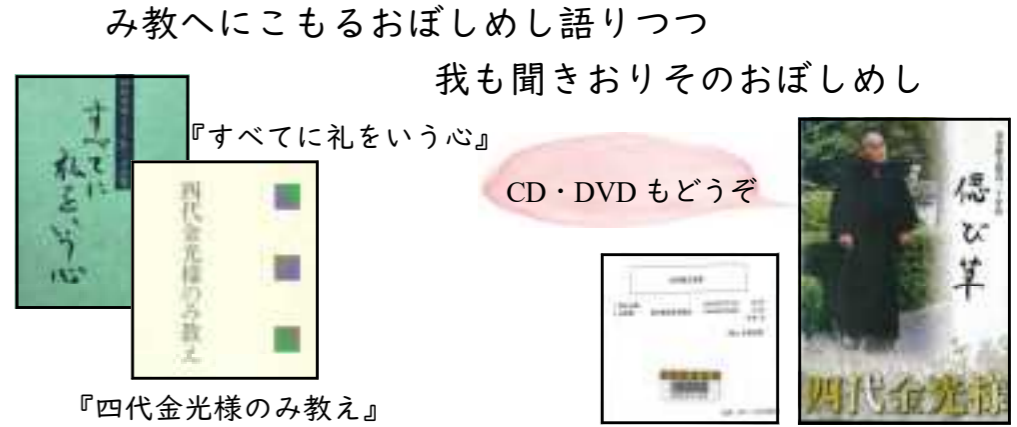


写真家としてのお姿

先生のモチーフは撮影旅行にゆくとか、遠出されることは許されませんので御霊地を一步も出ておりません。今でも強く印象に残っているのは、木綿崎山から田園地帯を走る蒸気機関車が秋空に白煙をたなびかせながら過ぎてゆく姿を心象的にとらえ、何回も何回も写されたことです。叙情詩的な風景と共にポートレート写真も大変お得意で、その当時の版画家棟方志功先生が、緋の着物に胸に白紙をちよっとのぞかせたあの独特の風貌を撮られた写真は、同じく今でも強烈な印象として残っております。

花田富士雄／著 『いのちの今』より

四代教主金光様としてのお姿



み教へにこもるおぼしめし語りつつ

私も聞きおりそのおぼしめし

『すべてに礼をいう心』

CD・DVD もどうぞ

『四代金光様のみ教え』

※この他にも関連書籍が多数ございます。郵送貸出・貸出期間の延長もできます。皆さまのご利用を、お待ちしております。